

クビアカツヤカミキリの生態と探索法

本章ではクビアカツヤカミキリがどのような虫で、被害を探すにはどうしたらよいのかを説明します。

(1) 被害の様子

クビアカツヤカミキリの幼虫は、幹の表面から少し内側にある内樹皮の部分を食べて成長します。内樹皮は木の中で養分を運ぶ役割を担っているので、幼虫が食害するとそこから先の枝が枯れてしまいます(写真1)。

1本の木を多くの幼虫が加害すると、その後、1年から数年で枯死してしまふことがあります(写真2、3)。



(写真3) 枯死したモモの中に潜んでいた幼虫



(写真1) 左側の枝が枯れてしまったサクラ



(写真2) 枯死したモモ



(写真4) モモの木の地際に溜まったフラス



(写真5) サクラから出てきた細いフラス



(写真6) サクラから出てきた太いフラス

クビアカツヤカミキリの幼虫が木の中にいるのかを探す手掛かりはフラスです。フラスとは、幼虫が木の内部から押し出す排出物で、木くずと虫糞の混ざったものです(写真4)。幼虫はある程度成長すると排糞孔と呼ばれる穴を樹皮にあけて、木の中の邪魔なフラスを外に出します。クビアカツヤカミキリは5～9月に盛んにフラスを排出するので、そのフラスを目印にすることで、被害を早くに発見できます。クビアカツヤカミキリのフラスは幼虫が小さい時は、小さな排糞孔を穿ち、太さ2mmほどの細く連なったフラスを出します(写真5)。幼虫が大きくなると最終的には太さ8mmほどまで太くなり(写真6)、十分に発育した後に木部(内部の材の所)へと掘り進むときは木くずを多く含むフラスを大量に出します(写真7)。

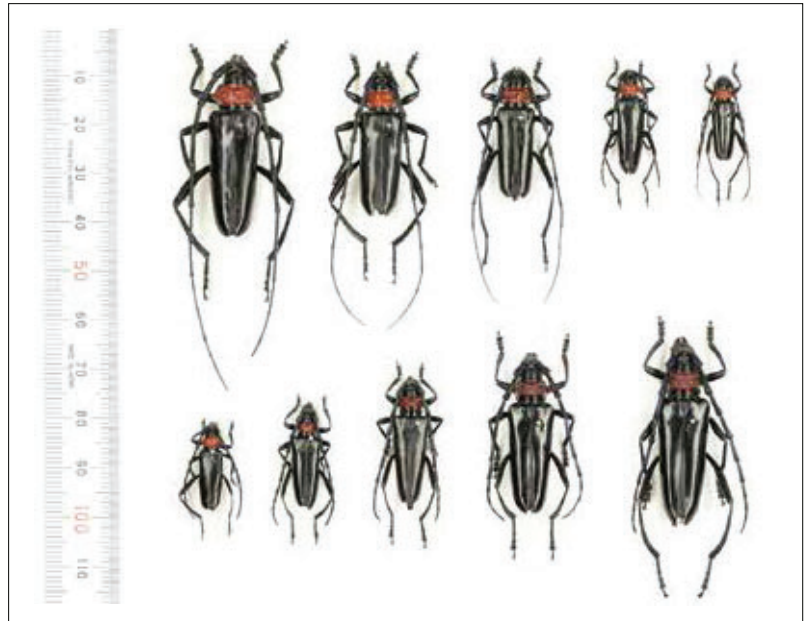
近隣でクビアカツヤカミキリの被害が発生したら、このようなフラスの発生がないかを地域の目で注視することが被害を封じ込める鍵になります。



(写真7) 木くずを多く含む大量のフラス



(写真8) クビアカツヤカミキリ雌成虫

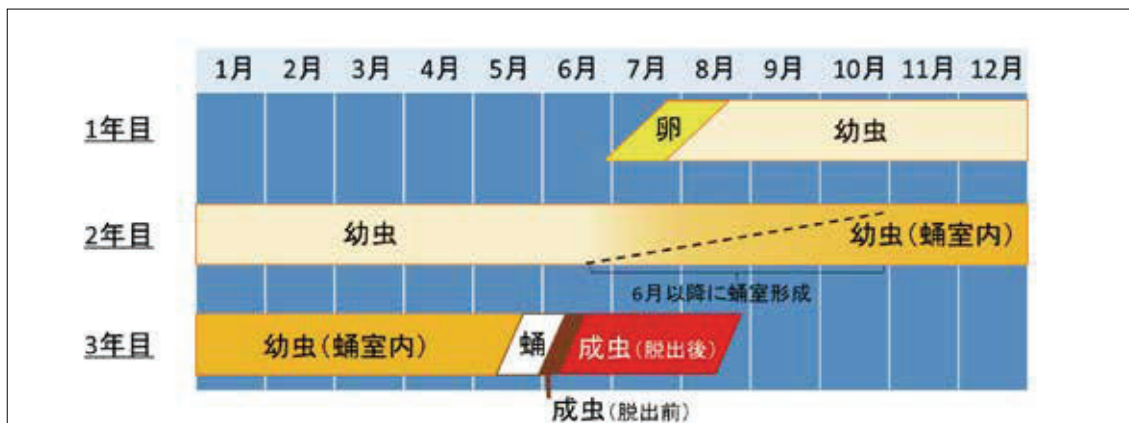


(写真9) クビアカツヤカミキリの成虫の体サイズの変異 上段雄 下段雌

(2) 生活環と各ステージの形態

クビアカツヤカミキリの成虫は6月初旬(春の進みが早い年だと5月末)から7月の下旬までの間に、木から脱出して姿を現します(写真8)。成虫の体長は3~4cmのものがほとんどですが、個体差が大きいです(写真9)。雌雄は触角の長さで見分けられ、触角の長さと体長がほぼ同じであれば雌、触角が体長の2倍近く長ければ雄です。成虫は、脱出直後から交尾し産卵することができます(写真10)。卵は樹皮の隙間に産み付けられます。クビア

カツヤカミキリは産卵数が非常に多く、1000個を超えて産卵する雌がしばしばいます。産卵後2週間程度で卵は孵化し、孵化した幼虫はすぐに樹皮下に潜り込みます。樹木の状態によって異なることがありますが、幼虫期間は基本的に2年間で、冬の間は活動を休止します(図1、写真11、12)。幼虫は2年目の夏に木部に蛹になるための部屋(蛹室)を作り、その中で3年目の初夏に蛹に、そこから1ヶ月ほどで成虫に育ちます(写真12)。脚のないいもむし型の幼虫は、蛹になると脚や触角をそなえるようになり、雌雄が見分けられるようになります。



(図1) 栃木県の実験林における生活環(2年1化)



(写真10) クビアカツヤカミキリの卵



(写真11) 樹皮下の幼虫



(写真12) 蛹室内の蛹



(写真13) クビアカツヤカミキリのフラス



(写真14) コスカシバのフラス



(写真15) ゴマダラカミキリのフラス



(写真16) 蟻道

(3) フラスの形状と類似種との比較

上述の通り、幹から排出されたフラスは、クビアカツヤカミキリの幼虫が木の中に潜んでいることを見つける重要な鍵になります。しかし、サクラ、モモ、ウメなどのバラ科の樹木の幹からフラスを出すのは本種だけでなく、日本在来の昆虫にもそれらの木に潜り類似するフラスを出す種がいます。クビアカツヤカミキリのフラスかその他の在来種のものかを見分けられると、被害調査の精度を上げることができます。ここではクビアカツヤカミキリのフラスの特徴と、在来種のフラスとの違いを説明します。

クビアカツヤカミキリの出すフラスは幼虫の発育段階でも変わりますが、最もよく見られるのが2～5mmほどの太さで、排糞孔から虫糞と木くずがひき肉のように連なって出てくるものです(写真13)。崩して拡大すると、木くずはスプーンでくりぬいたような形をしています。フラスの色は明るいオレンジ色から褐色です。被害初期の木では地面のそばからフラスを出すことが多く、徐々に上方からも多くフラスを出すようになっていきます。クビアカツヤカミキリは長い坑道を掘るので、1匹の幼虫が移動に伴い何か所も排糞孔を作ることがあります。被害が激しいと木の地際に大量のフラスがたまり、非常に目立ちます。

在来の昆虫では、コスカシバとゴマダラカミキリがバラ科の樹木の幹からフラスを出します。他にウスバカミキリのフラスも時折みられますが、ゴマダラカミキリのフラスに似ているので、ここでは取り上げません。

コスカシバは、幼虫がバラ科樹木を利用する蛾です。成虫は、翅に鱗粉をもたず透明で、蜂のような見た目をしています。コスカシバの幼虫が排出するフラスは、クビアカツヤカミキリのものよりも黒っぽくコロコロとした虫糞が目立つのが特徴です(写真14)。コスカシバのフラスは、クビアカツヤカミキリのものよりもはるかに少

量で、地際に降り積もるようにたまることはほぼありません。また、コスカシバの幼虫は、幹の中でも盛り上がって瘤になっている所や、分枝近くの樹皮が分厚くなっている所を食害していることが多いです。フラスがどのようなところから出ているのかも気をつけて見ると、クビアカツヤカミキリと判別しやすくなります。

ゴマダラカミキリとクビアカツヤカミキリのフラスは色がよく似ています。また、どちらも似たようにフラスが連なるため、見分けるのが少し難しいです。区別するポイントは、フラスに含まれている木くずの形です。クビアカツヤカミキリのフラスに含まれる木くずはスプーンでくりぬいたような形になる一方、ゴマダラカミキリのフラスは引きちぎってささくれた長い繊維状の形をしています(写真15)。

そして、木の上に道のようにになっている木くずの集まりが見つかることもあります。これは蟻道^{ぎどう}と言い、樹上で生活するアリが自分の通り道を守るために作るものです(写真16)。蟻道は木の上に細長く付着することから、クビアカツヤカミキリのフラスとは区別することができます。

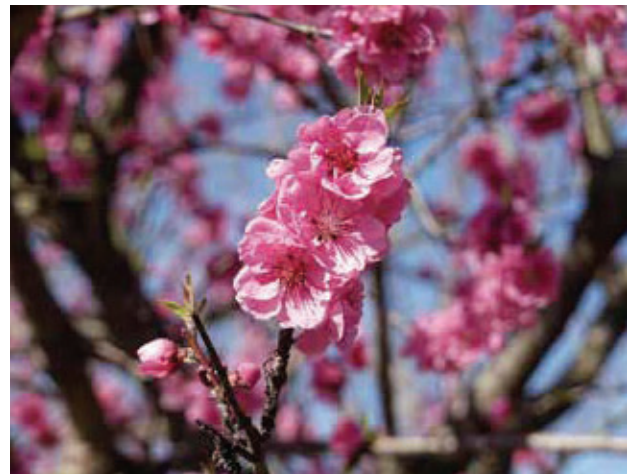
(4) 加害対象となる樹木

クビアカツヤカミキリはバラ科の樹木を加害します、バラ科のうち日本国内で本種の加害が確認されているのは、モモ(ハナモモ含む)(写真17、18)、プルーン、ウメ(写真19)、スモモ、アンズ(写真20)、サクラ(ソメイヨシノ、オオシマザクラ、ヤマザクラ)といったサクラ亜科に属する樹木です。国内でもっとも被害本数が多いのはソメイヨシノですが、これらの樹木の中でクビアカツヤカミキリが最も加害しやすいのはモモ類(モモ、ハナモモ)であることが分かってきました。

リンゴ、ナシ、ビワはサクラ亜科以外のバラ科樹種ですが、これらの樹木での被害は現時点では見つかっていません。これらの枝に幼虫を人工的に接種したら、幼虫が成長できた場合があるので、今後も決して被害が発生しないとは断言できませんが、サクラ亜科以外の樹種はサクラ亜科でこれまでに被害が確認された樹種よりも被害を受けにくいことは確かです。なお、サクランボが採れるオウトウ(セイヨウミザクラ)の被害はまだ国内で生じていませんが、海外では被害の報告があります。将来オウトウの栽培地へ本種が侵入してしまったら、加害されてしまう可能性が高いです。



(写真17) モモ被害木



(写真18) ハナモモの花



(写真19) ウメの花



(写真20) アンズ被害木